

# 地中海沿岸の街づくり

研究第二部 主任研究員 武田修一

夏の暑さも峠を越した昨年の8月下旬から2週間地中海沿岸地域の街を見学する機会がありましたので、地中海沿岸地域の街について紹介します。

地中海沿岸地域は、歴史的に深いつながりを持っている一方で、現在はイスラム教文化圏とキリスト教文化圏に分かれ、風土も著しく異っており、建物や集落等も大きく異ってきています。

## 1. 永遠性を表現した建物

イスラム教がおきる以前の古代の時代を伝える建造物としては神殿とかピラミッド等古代の権力者が記念碑的につくられたものが主であり、街としてははっきりしないところが多い。建造物群が集積したものとしては、かつてはテーベといわれていた（現在はルクソール）ナイル川中流の東岸に位置し、第12～20王朝のファラオたちがアモン神に捧げたカルナック神殿があります。ナイル川から東に向かい第1塔門まで40頭のスフィンクスが並んだ参道があり、第1塔門から奥へは第2塔門、第3塔門と第6塔門まであり、そこで聖所に至ることになります。塔門と塔間との間は広場となっており、特に第2塔門と第3塔門との間については、大列柱室になっており134本の砂岩の巨大な列柱がならんでいます。このようにカルナック神殿は巨石を城壁や列柱として積み上げ建築に永遠性を表現しようとしています。

## 2. 迷路のような街

記念碑的な作り方の対極にあると思われるのがモロッコ

のフェズの古いまちです。フェズはモロッコの4つの王都（マラケシュ、ラバト、メクネス、フェズ）のうちで最も古い歴史を誇る都で、9世紀にイスラム教が流入して以来今でもイスラム教の信仰、文化の中心地として重要な位置を占めています。

フェズの街は12世紀前後にひとつの統一された城壁に囲まれたフェズ・エル・バリとよばれる古い街と増える人口に絶えきれず1276年に建設されたフェル・ル・ジャディド、そして現在の新市街地に分かれています。

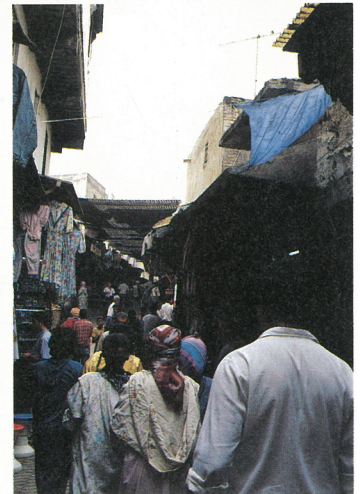
フェズ・エル・バリとよばれている地区は、この地域の気候や侵入者に対する防備等により内庭形式の建物でお互いに壁や床を接し、自己増殖してできたようになっています。建物と建物との間にはすきまのような空間が不規則的に延びており、道路を形成しています。この道路の巾は1mから2m程度であり、主な道路に面したところには店舗がはりついています。道路の幅員がせまく、また大きな広場というものがなくて街の全体像を把握しそのなかで自分の位置を把握するのではなく、相互の関係のなかで位置



カルナック神殿



フェズの市街地



フェズのみち

を把握するような街の構造になっている。外部の丘からみると見立つモスク等についてもこの地区のなかに入り込むと遠くから場所を確認することはできず、その場所にきてはじめてわかるようになっていきます。この建物の隣に何が、その建物の隣に何かがあるのかを知っている住民にとっては困ることはないが、十分に理解していない外部の人にとっては迷路のようになっていきます。

### 3. 中心性を意識させる街

キリスト教文化圏ではイスラム教文化圏とは大きく相違し、小さな集落においても丘の上とか、まちの中心に大きな教会が建ち、教会の前には広場が設けられ、たとえ建物により視線が妨げられていても、少し視線を動かすと教会を見ることができるようになっており、教会が都市のなかで中心性を意識させるようになっていきます。たとえば、エーゲ海にうかぶティノス島の小さな集落においても、港から丘に向かい大通りがつくられ、その先には建物としては大きくない教会が建てられており、教会がまちの中心であることを示しています。

### 4. 白いまちミコノス

スペインの小さなまちでも教会が一番めだつ所に建てられていますが、ティノス島の近くにあるミコノス島は大きく異なっています。

ミコノス島は海からみると建物はおもいおもいにつくられています。壁はすべて白いしっくい塗られており、統一感のある景観を示しています。

ところがミコノス島では中心性を意識させるものがありません。大きな教会はなく小さな個人礼拝堂が多数作られています。

### 5. まとめ

以上のように文化圏の違いによりまちのあり方が大きく違ってきています。日本においては近年までは木造ということによる制約もあり統一感のある形態をしめしていました。現在においては多様な構造が選択できるようになったことが結果として混乱をまねいてきたところがあります。今後のまちづくりを考える上で今回の報告が役立てばと思います。



ティノス島



ミコノス島



ミコノス島のみち